

早魃の段および二兵士による旅の段

『解放されたエルサレム』第十三歌途中から第十五歌冒頭まで

La traduzione giapponese della *Gerusalemme liberata*

Dal Canto 13 (ottava 24) al Canto 15 (ottava 7)

水野 留規

MIZINO Ruki

Il presente articolo contiene la traduzione della *Gerusalemme liberata*,

dall'ottava 24 del Canto 13 all'ottava 6 del Canto 15. I cristiani tentano invano di abbattere, per ricostruire la "torre" distrutta, gli alberi della selva incantata, e perfino Tancredi, terrorizzato dalla voce di Clorinda uscita dall'albero, rinuncia ad indagare le cause dei prodigi. Il campo cristiano è tormentato anche dalla siccità che ha colpito la zona della Santa città. Dio accoglie la preghiera di Goffredo e dispone che sia inviata la pioggia, che Rinaldo ritorni al campo, e che sia sconfitto l'esercito egiziano. Due cavalieri partono per cercare Rinaldo che, secondo il Veglio di Ascalona, si trova nel palazzo di Arnida.

第十三歌 (前回の続き) (一)

二十四 兵士はこう言った、その発言を聞いていた大勢の中にアルカストもいたが、この男は命や死というものに無頓着で、異常なまでに無鉄砲で、気性も荒々しかった。猛獣は言うに及ばず、強靱な男にまで恐怖を抱かせる怪物も、地震も、稲妻も、破壊的な一切の事象も、かれの怖れるところではなかった。二十五 アルカストは首を横に振って、笑みを浮かべつつ言った、「この者が行こうとしなかった場所に俺は行ってみせよう。人を惑わす亡霊が巢食っている森を俺は一人で伐採してみせよう。奇怪な幻影を目にしても、木々のざわめきや鳥の甲高い声を聞いても、不気味な森の一角で地獄へと続く道を見つけたとしても、俺は怯むことなく作業を続けよう。」二十六 このように騎士は司令官の前で豪語し、いとまごいをして出發する。森を見つめ、森から発せられる不気味な音を聞いたが、大胆な歩みを後方に転じて引き返そうとはせず、臆することなく平然と進み続ける。だが、

〔悪魔に〕支配された森にもう踏み入っていたかもしれない〔そのとき〕、火焰によって（かれにはそう思われたのだが）行く手を遮られる。

二十七 大火は勢いを増し、猛煙が高い城壁の輪郭を描くかの如くに拡がる。炎に取り囲まれた森は、木々を切ったり倒したりしようとする輩の侵入を阻む。幾つもの巨大な炎の塊が合わさって塔を備えた厳めしい城郭を形作り、この新たな地獄の町に武装された砦を設置する。二十八 おお、聳え立つ城壁の狭間は、なんと多くの悪魔たちによつて護られ、悪魔たちはなんと恐ろしい形相をしていることか！悪

意に満ちた目でアルカストを睨み付ける者もいれば、武器をかき鳴らして脅そうとする者もいる。アルカストはついに逃げ出すが、その逃げ足はゆっくりで、狩人に迫られた獅子の後ずさりに似ている、だが逃避であることは間違いない。かれの胸は怖れに揺すぶられるが、怖れというものをかれはこの瞬間までおぼえたことがなかった。二十九

自分が恐怖に駆られているとその時は思わなかったのだが、遠くまで逃げおおせると、わが身に恐怖が去来したことを悟った。驚き、怒り、悔しさが嵩じて心臓を鋭い歯で噛まれたように感じた。そして不覚に恥じ入って赤面し、言葉を発することもなく、茫然自失の体で陣営の片隅に引きこもり、あれほど自信に満ちていた顔を上げようとしなかった。三十 ゴッフレードと呼ばれても、応じようとはせず、言い訳をして、その場に留まろうとする。ついに重い足取りで向かうが、口は閉じたままで、話したとしても、夢を見ている人のように話す。アルカストが常になく億劫な態度で振る舞うのを見て、司令官はかれが怖気づいて逃げ戻ったことを察知して、言った。「そなたの変貌は何故なのか？魔術の仕業なのか、それとも不可思議な自然の力に

よるものなのか？三十一 ともあれ〔諸君〕、この場にもし、かの未開の地を探索しようという気高い志の者がいるならば、森に入つて、計画を実行してもらいたい、もう少し確かな情報を持ち帰つてほしいのだ。」このように司令官が言ったので、主だった戦士たちはそれからの三日間、不気味な森を調べようとした。しかし、その魔力に耐えかねて、一人残らず森から逃げ戻った。

三十二 そのころ王子タンクレーデイは友なる女戦士ケロリンダを埋葬するために床から起き上がっていた、青白く弱々しい表情をして、兜や鎧の重さに耐えるだけの体力も戻っていないが、軍の急務を耳にして危険や苦勞を厭うような男ではない、それは激しく鼓動する心臓が活力を身体に与えているからであり、かれの全身には見るからに生氣が漲っている。三十三 勇士は意を決して、静かに、用心深く、危険な魔の領域に向かつて進む、峻厳な森の相貌にも、雷鳴や地鳴りにも怖気づくことはない。はつとすることはあつても、すぐに落ち着きを取り戻し、恐怖を抱くには至らない。先へと足を踏み出した、とその時、生い茂る木々の間に炎に包まれた町がにわかに見出す。三十四 かれは歩みを止め、しばし身動きせずの様子を窺い、呟く。「ここでは武器が何の役に立とうか？怪物どもの口の中へ、火焰を噴き出しているその喉元へ、われは突入すべきか？それが万人にとつての善を生むためならば、何者も命を惜しんではならぬ、だが分別のある者は自らの貴い魂を無駄に滅ぼすことも避けねばならぬ、ここで身を賭す者はまさに愚か者。三十五 しかし、もし何の成果もなく戻れば、軍の者たちは私に何と言うだろうか？ほかに木材を調達できる森があるだろ

うか？この炎の壁を乗り越えようとせずして退却することは、ゴツフレードの望むところではないだろう。もしここを通過することができらば、私の眼前で燃え盛っている炎は、外観から思われるほど強い火力を発していないのだろう。もはや何が起ころうとも構わない。」

そう言うと、炎の中に飛び込んだ。おお、これこそは記憶されるべき勇気！三十六 炎から発せられるはずの熱や肌の痛みは、鎧に包まれた体には感じられないようだった。本当の炎なのか、偽りの炎なのか、すぐに見分けられないほど、かれの感覚は実際におかしくなっていた、炎と思われるものに触れるや、それはたちまち消え去って、闇と冷気を運んでくる厚い雲が立ち込めて、それらもあつという間に消え去る。

三十七 タンクレーディは驚き入ったが、闘志は絶やささない。周囲が静まり返ったのを見届けると、先ほどまで邪悪な城門があつたところで躊躇することなく踏み込み、森の中を隈なく見て回る。もう怪しげなものや奇妙なものはなく、歩みを妨害されたり、行く手を遮られたりすることも無い、もっとも下草が茂り、薄暗い森の中では、視界を確保することや、足早に進むこと自体が困難なのだが。三十八 やがて目にしたのは円形劇場のような広い空地、そこに草木は生えてないが、中心には一本の杉がピラミッドのごとく聳え立っている。その木のほうにタンクレーディは進み、木を見ているうちに、幹にはさまざままな記号が彫られていることに気づく、それらは謎に満ちた古代エジプトで文字の代用として使われていた絵文字のようである。三十九

不可思議な記号の中には、タンクレーディが解読することのできるシリア語の文字列が見出される。《おお、大胆な騎士よ、死者の領域によくもぬげぬげと足を踏み入れたものだ、ああ、もしおまえが強いだ

けではなく情け深いならば、ああ、この聞ざされた墓所を掻き乱さないでくれ。いまや息絶えた者たちを憐れんでくれ、生きている者が死者達と争うことは許されぬ。》四十 このように書かれていた。タンクレーディがこの短い文に込められた意味を懸命に探ろうとしていて、森の枝木や下草の間から震えるような風の音が絶え間なく聞こえてきて、その中には人の嘔きやすすり泣きが混ざったような物悲しい響きも含まれ、取り乱したかれの心に漠とした憐れみと驚きと悲しみの念を滲みこませる。四十一 しかしタンクレーディは剣を鞘から抜き、杉の太木を力強く斬りつける。おお、何という驚異！切り裂かれた樹皮から血が流れ出て、周りの地面を赤く染めるではないか。かれは慄然とするが、さらに力を込めて一撃を加え、それによってどうなるか見ようとする。すると、墓の中から出るような重々しく、苦しみに満ちた呻き声が木から漏れ出るが、四十二 その声は次にはつきりとした言葉に変わり、「ああ、ひどい仕打ち」と言った、「タンクレーディ、あなたは私に傷を負わせました、もうこれで十分でしょう。あなたにはわが魂に任せ、寄り添って生きた肉体から、わが魂の生前の幸せな宿から、わが魂を放逐しました。苛酷な運命ゆえにわが魂を閉じ込めた惨めな幹を、何故にまだ懲りずに傷つけるのですか？墓の中にいる息絶えた敵を、残酷な人よ、苦しめたいのですか？四十三 私はクロリンドでした、そしてこの荒々しく堅い木には私以外の人間の魂も——高き城壁の下で肉体から離れた魂は、フランク人であろうが異教徒であろうが、知られざる不可思議な魔法によってここに連れてこられるがゆえ——宿つていますが、この木がわれわれにとって体なのか墓なのか、私には分かりません。この木の枝や幹には生きた感覚が

備わっていますので、あなたが木を傷つけるならば、それは殺める行為なのです。」**四十四** 病人が夢の中でときに竜もしくは炎に包まれた恐ろしい怪物キマダを見て、それが幻影であることを疑い、もしくは少なからずそう確信しているにもかかわらず、きわめて凶暴なその姿に怖れを抱いて逃げようとするように、恋に囚われ気後れた男は樹木から発せられた言葉が偽りの戯言と半ば思いつつも、それでも怖れ、後ずさりする。**四十五** かれの心はかくして深いところで諸々の想念——怖れの感情はその中で最も弱かったのだが——に支配され、冷たくなつて打ち震え、その強い振動は直ちに手に伝わつて握つていた剣を落下させる。精神に異常をきたしたかれは、傷ついた愛しき女性が自らの目前で涙して懇願していると思ひ込み、流れ出た血を見つめることも、次第に消えてゆくかの呻き声を聞くこともできない。**四十六** かれの大胆な心は——このように死を覚悟した「火中への突入の」ときですら——あらゆる種類の脅威にも動じなかったが、かれ自身は恋に対して脆かつたので、見せかけの像と偽りの嘆きに騙されてしまった。地面に落ちたかれの剣はやがて一陣の風によつて森の外に吹き飛ばされ、かれは弱々しくその場から離れた。陣営に戻る途中に剣は見つかり、かれは再びそれを手にしたのだが。**四十七** しかし、かれは「森の中に」戻ろうとはせず、「不可解な現象の」原因を突き止めようともしなかつた。そして司令官の前に進み出ると、気持ちを集中させ、心を鎮めて語り始めた、「閣下、私は人々が信じようとはせず、信じられるはずもないことを申し上げます。兵士たちが語っていた恐ろしい光景や不気味な音は、すべて真実です。**四十八** それらに続いて、驚くべき炎が私の前に現れたのですが、火口もないのに一瞬のう

ちに点火して、燃え広がつて城壁のような形を成し、武装した怪物たちがそれを守っていました。しかし、私はその炎を通り抜け、火傷することもなく、剣で進路を遮られることもありませんでした。続いて寒気と闇が周囲を包みましたが、やがて光と静けさが戻ってきました。**四十九** もつと信じがたいことを申し上げましょう、感覚と言語能力を備えた人間の魂が木々に生命を与えているのです。確かに私は聞いたのです、泣くような声は今でも私の心の中で響いています。幹のあらゆる傷口から血が滴り、まるで柔らかな肉に包まれた人が中に潜んでいるようでした。断固として、断固として私には（自らが挫折者であることを認めます）できません、もはや樹皮を剥ぐことも、枝を折ることも。」**五十** タンクレーデイがこのように述べている間、司令官の心は嵐の中の波のごとくに揺れる。自らが森へ向かつて魔術を解くべきか（魔術に原因があるとかれは考えるのだが）、それとも距離は遠くとも、さほど「伐採に」大きな困難を伴わない別の森から木材を得るべきか思い倦む。だが、苦惱に沈むかれを隠者ヒエトが元気づけ、続いて言う。**五十一** 「無謀な行動に出ようとなさるな。森を伐採する役目はあなたが負うべきではありませんぞ。いまや天の遣わされた舟がひとけのない海岸に触先を近づけ、金色の帆を降ろそうとしています。帰還の待たれている英雄が、恥ずべき鎖を断ち切つて、岸边から船出しようとしています。もはや遠くありませんぞ、シオンの町（エルサレム）が征服され、敵軍が打ち破られるとされる日は。」**五十二** ピエート口は顔を真っ赤にしてこのように語り、その言葉には神々しい響きがある。敬虔なるゴツフレードは「木材の確保を」無為に断念しようとは思わないので、新たな策に思いを走らせる。

だが、すでに蟹座の域に入った太陽が厳しい早魃をもたらし、ゴッフレードの計画や戦士たちの行動を妨げ、あらゆる作業を耐えがたきものとする。五十三 幸なる光は天空からことごとく消え、空に君臨するのはつれなき星々、それらが発する負の力は妖しく不吉な気配を大気に刻印し、浸透させる。耐えがたい猛暑が到来し、時間の経過とともに、何処も命に危険が及ぶほどの灼熱の地と化す。忌まわしい昼の後にはおぞましい夜が訪れ、夜はおのれより苛酷な日がおのれの後に巡りくるのを見届ける。五十四 昇る太陽はかならずや赤い蒸気に周囲と中心部が包まれ、それを見た誰もが不幸な一日の始まりをしかと確信する。赤い斑模様まだらに彩られ、けつして沈もうとしないのだ、再び昇るときに同じ苦しみを地にもたらすことを予告せずにしては、疲れ切った人々を翌日の苦しみに対する怖れでさらに疲れさせずしては。五十五 光の熱線が天空の高みから降り注いでいる間、人は周囲の何処を見渡しても、目にするのは枯れゆく花、黄ばむ葉、乾いて萎れゆく草、そして地面が割れて、水が蒸発していく様、あらゆるものが天の怒りを買ひ、あちらこちらに浮かぶ不毛の雲も炎の塊のような姿を呈する。五十六 空は毒々しい輝きを発する炉にも似て、何一つ目の保養になるようなものはない、西風ゼッポは洞くつの中で鳴りを潜め、大気の心地よい流れは完全に封じられている。唯一アフリカの砂漠で発生した（松明のように熱い）風だけが吹き抜け、砂の粒子を含んだ重苦しく、煩わしい風が人々の胸や顔を絶え間なく打つ。五十七 夜になつても涼を伴った闇はもたらされず、太陽の熱が闇に刻み込まれているかのようなのである、夜の帳は燃えるほうき星の尾のごとき糸で織

られ、熱を含んだ多様な飾りを付けている。哀れな大地よ、おまえの渴きを無慈悲な月は露の滴りでもって癒そうとはせず、命を保つために湿りが必要な草花の願いも虚しく消散する。五十八 安眠は騒々しい夜と相容れず、憔悴した人々が媚を呈して引き寄せようとしても逃げていく。だが喉の渴きは諸悪の中でも最たるものであり、故にユダヤの邪悪な王アフラハイムはあらゆる泉の水を汚し、飲めなくしたのであり、そのために用いられた毒や液体は地獄のステュクスやアケロンの水を凌ぐほど苦く、人体にとって有害なものであった。五十九 シロエ（エルサレム近郊を流れる川）の澄んだ清流はフランク人兵士たちにその至宝の水を惜しむことなく与えていたが、今では乾いた川底に生温い水が少し流れるだけであり、渴きを癒すには適さない。大量の水を湛えた五月のポー河でさえ兵士たちの望みを叶えるには十分ではないと思われ、ガンジス河も然りであり、また七つの支流が氾濫して、緑濃いエジプトを水浸しにするときのナイル河とて然りである。六十 もし兵士たちの誰かが銀色に輝く透明の水が林間の川辺で渦巻くのを、あるいは清冽な川の水が山から流れ落ちるのを、または広い草原の中をゆつくりと流れるのを思い描いたとしたら、かれはこうしたイメージを自身の切なる願いと重ね合わせてしまったために、自らの苦悩を増大させてしまう、つまり冷気を含んだ爽やかな水の幻想がかれに喉の渴きと体温の上昇をいっそう意識させるので、かれの頭の中も熱を帯びてくるのである。六十一 頑強な兵士たちの四肢を見るがよい、過酷な土地を行軍しても、重たい武器をその際に身につけても、敵の剣に命を狙われても屈しなかつたかれらの体は、いまや衰弱し、太陽の熱によって焦がされ、役に立たない重石のごとく不動である。血管の中

では血液がいつの間にか温められ、全身に行き渡る過程で体を徐々に蝕んでいく。六十二 以前は勇猛だった軍馬も弱り切って、好物だった草を食べようとしない、その足取りはおぼつかなく、かつては高く擡げていた首もいまや下に垂れている。自らが勝ち誇った時のこととはすっかり忘れ、榮譽を得ようとして健気に奮い立つこともない。勝利の賞品や豪華な飾りは忌み嫌うべきもので、呪わしい荷物と変わらないと思っているかのようである。六十三 忠実な犬も氣力を失い、大切な家と主人を守るという役目を忘れ、寝そべって、常に激しく息をして、新たな空気を体内に送ることで体温を下げようとしている。だが、もし自然が動物に呼吸の機能を与え、その目的が体内の熱を下げることにあったとしたら、ここにいる動物は全く、あるいは少ししか涼氣を得ていない、なぜなら吸い込んだ空氣が重たい砂埃を大量に含んでいるのだから。六十四 大地もまた疲弊し、こうした状況の中で病んだ人間や動物は哀れにも倒れ込む。善き信仰の戦士たちも戦いに勝利することはもはや諦め、最悪の事態に陥ることを恐れていたのだが、至る処で同じような類いの、次のごとき嘆きの言葉が聞かれた。「ゴツフレードは何をまだ望んでいるのか、何を躊躇しているのか、自らの軍勢が死の淵にいるというのに？ 六十五 ああ、敵軍の堅牢な城壁をどうやって攻略することができると思っているのか？ 壁破車（の資材）をどこで得ようとしているのか？ 天の怒りは多くの形象に示されているのに、かれにはそれが見えないのか？ 天がわれわれを懲罰され給うていることは、無数の奇跡や奇怪な現象から確かであり、だからこそわれわれは——インド人やエチオピア人でさえこれほどまで体を冷ます必要には迫られ

ないほど——体を焼かれている。六十六 かれは果たして考えているのか、おのれの統率者としての地位を守るためなら、われわれが——われわれは愚鈍で、粗野で、卑しく、低劣な精神しか備えていない集団であるが——無残な死を迎えても構わないとでも？ 部下たちがたとえ苦しんでいても、権力をあくまで握り続けようとする事ができるほど、君臨する者には幸運が付いて回るのか？ 六十七 さあ見るがよい、「情け深い人」という異名を持つ男の哀れみ深い配慮と人間愛に溢れた精神を。無益で、有害でさえある自らの名譽を失わないために、この男は家来たちの命を顧みない。われわれが水を汲む泉や小川が枯渇しているのを知っているのに、自らのためにヨルダン河から水を運ばせ、愉快的宴席に少数の仲間と着いて、冷たい水やクレタ産のワインを飲み交わしている。」六十八 フランク人たちはこのように話していたが、かれらの軍旗に従うことに嫌気がさしていたギリシャ軍の首領（「タティーン」）が言った、「なぜ、ここで死ぬことになのか？ わしといっしょに、なぜわしの軍勢が死ななければならぬのか？ もしゴツフレードが狂気のゆえに盲目になったのなら、その見返りはかれ自身が、そしてフランク人兵士たちが受けなければならない。わしらが損害を被る必要があるか？」かれは別れの挨拶を誰とも交わすこともなく、夜になると黙って出発した。六十九 かれの行動は翌朝になるとすぐに判明したのだが、軍の兵士たちに大きな衝撃を与えた。かれに続こうとする者も現れる。いまや骨と土塊と化したクロタレーオやアダマール、そして他の（戦死した）武將らに仕えた者たちは、すべてを解き放つ者（死神）が主君に対して誓った忠誠を無効にしたと言って、軍から離れることをすでに宣言し、黒い空氣に紛れ

て、密かに軍から離脱する者も現れる。

七十 こうした動きをゴツフレードはしかと耳にして把握し、厳しい処罰を科す準備も整えるが、それはかれの望むところではなく、実行には移さない。川を堰き止め、山を動かすほどの信仰心でもって、かれは世界の王〔神〕に向かつて恵みの泉を開き給うよう慎み深く願う。両手を合わせ、熱情で燃え上がった目と言葉を天に向ける。七十一 「父なる主よ、もし汝が荒野にいた汝の民に甘い露をかつて降らせ給うたのであれば、もし岩を砕き、山中の割れ目から水を噴出させる力を汝がかつて人の手に与え給うたのであれば、どうか同じような奇跡をこれらの者たちのために起こし給え。もしこの者たちの功績が〔約束の地を目指して進んだヘブライ人たちのそれに〕劣るのであれば、汝の恵みによつてかれらが欠いている分を補い給え、かれらが汝の戦士であると呼ばれるに値するようかれらを導き給え。七十二 義にかない、慎ましい願いから発せられたこうした祈りが伝わるのは遅くなかつた、それは飛翔する鳥のごとく早く、軽々と天に昇り、神の御許に達した。永遠の父〔神〕は願いを解すると、慈悲深い視線を聖なる軍勢の方へ向け、兵士たちがかくも危険で過酷な状況に置かれていることに遺憾の御意を示され、優しい口調で語り給うた。七十三 「これ以上はならぬ、愛でられた軍勢が危険と苦難に満ちた状況に置かれ、地獄と地上の輩が武器と魔術を駆使してそれに立ち向かうのは。今こそは戦況が転じる時、キリスト教軍が優勢に立ち、喜びに包まれる時。雨よ、降れ。無敵の戦士よ、軍に復帰せよ。かれの栄誉のために、エジプト軍よ、到着せよ。」七十四 このように宣い、頷き給

うた。広い空や遊星や恒星が振動し、大気や大海原や山や暗黒の淵が轟しく震えた。左手の空では炎のごとき稲妻が見られ、同時に雷鳴がはつきりと聞こえた。それらに合わせて人々の歓喜の音が響き渡った。七十五 見よ、突然現れた雲を、太陽の熱で地上から上昇した水蒸気の雲ではない、すべての扉を開け広げた天から一瞬にして降りてきた雲だ。見よ、夜がその影を周囲一帯に伸ばし、陽光を見る見るうちに包み込む。続いて猛烈な雨が降り出し、嵩を増した小川の水は川床からあふれ出る。七十六 夏に長らく待たれていた雨が降ってきたとき、おしゃべりなアヒルたちの群れが乾いた岸辺でしわがれた声を上げて嬉しそうに本降りを待ち、冷たい雨粒に羽を広げることがあるように、兵士たちは雨を避けようとはせず、少しでも深い水溜りに向かつて突進し、かねてからの願いを叶える。七十七 誰もが叫びながら、慈悲深き神の手が降らせ給うた雨に向かつて、歓喜のうちに挨拶する。皆、身体は言うに及ばず、髪をも濡らそうとし、或る者はガラスの水差しで、或る者は兜で雨を汲んで我先に飲もうとする。冷たい水の中に手を浸けたり、顔や額に水を掛けたりする者もいれば、瓶に入れて今後の備えようとする賢い者もいる。七十八 狂喜乱舞し、苦境を克服したのは人間たちだけではない、一部に亀裂が入るほど荒れ果てていた大地も雨水を得て再生し、地下の脈流へとそれを分散させ、植物や草花や花に滋養に富んだ水分を存分に与える。七十九 大地は葉によつて内臓の炎症を治癒させた女に似ている、女の体を餌にしていた病を根源から取り除くと、葉は女に気力と体力を与え、女を若いときのような姿に変貌させる。女はそれまでの苦しみを忘れ、花の冠を付けて祝祭の衣装に身を包む。八十 雨がようやく止み、太陽が戻ってきて、

柔らかで適度な光線を発する、四月の終わりから五月のはじめに感じられる雄々しい生命力を含んだ光線を。おお、気高き信仰よ、それは神を真に崇める者に宿り、あらゆる破壊的な行為を世から取り除き、季節の移り変わりや状態に変更を加え、星々や運命によつて引き起こされた苦難を克服する。

第十四歌

一 大いなる母〔大地〕の柔らかで瑞々しい懐から暗黒の夜がすでに現れつつあった、軽やかな微風と、透き通った貴き露を含んだ大きな雲を伴つて。夜は自らが包まれたボールの湿つた裾を振り動かし、花々や草に露の滴をまき散らし、そよ風は羽をばたつかせて人間たちを眠りへと誘つていた。二 そして人間たちは日中の心配事を甘く深い忘却の彼方へと投げ捨てていた。だが永遠の光に包まれて世を監視する世界の王〔神〕は玉座に座し給い、慈悲深く幸いなる視線をフランク軍の司令官に向け給うと、かれに夢をそつと吹き込んで神意をかれに明かそうとされ給うた。三 太陽が昇る黄金の扉から遠くない東の空に水晶の門があり、新たな日が現れる前にその門は常習的に開く。神が純真な心の持ち主に授け給う夢はこの門から出て行くのだが、敬虔なるゴツフレードに授けられた夢もこの門から出て、黄金の翼を広げてかれのもとへと降りていく。四 いまゴツフレードが夢の中で目にした像ほど魅惑的で華麗な幻想が人にもたらされたことはかつて一度もなかった。夢は天宮と星々の神祕をかれに垣間見せ、鏡に反射するように天空の星々に正確に映し出された神慮を感じさせた。かれは白熱の光で満ち、燃える星々で飾られた路〔銀河〕に自らがいるよう

に感じた。(三) 五 崇高な地の拡がり、星々の動きと輝き、調和が奏でる音にかれが注意を向けていると、かれのもとに光に包まれ、炎をまとつた一人の騎士が近づいてきた。かれは自らに話しかける騎士の声を聞いたが、それは下界で何にもまして心地よい音でさえ不快な音と思われるほど美しかった。「ゴツフレードよ、僕を迎えないのか？ 忠実な友と話そうとしないのか？ もう僕がウゴーネだと分らないのか？」六 ゴツフレードは騎士の呼びかけに応えた、「君の新しい姿は太陽の光に美しく照らされているようで、私の記憶にある以前の君の姿と結びつかなかった、いま漸く君だと分かったよ。」かれは親愛の情を込めて騎士の首の周りに腕を三度回したが、実体のない騎士は、ふわふわと宙を漂う夢、あるいは掴むことのできない空気のように、三度かれの腕から離れていった。七 騎士は微笑んで言った、「僕はもう、君が思っているような、地上の衣をまとっていないのだよ。君がここで目にしているのは空虚な形象とむき出しの魂、天上の都市に住む市民なのだ。こちらが神の神殿で、神の戦士たちはここにいます。君もここに居場所を与えられるだろう。」それはいつ？」とゴツフレードは言った、「必滅の紐〔肉体〕をいまや解いてくれないか、もし私がここに留まるためにそれが邪魔をしているのなら。」八 「近いうちに」とウゴーネは答えた、「君は勝者たちの群れに華々しく迎えられるだろう。しかしその前に君は下方の地で戦つて、血と汗を流さないといけない。聖なる土地の支配を異教徒からまずは奪回し、そこにキリスト教の王国を建設することが君の成すべきことで、その王国を継承するのは君の弟〔バルドヴィーノ〕なのだ。九 だが、君は上の世界に憧れてそちらにより関心があるようだから、魂たちの輝かし

い宿や不滅の知が介在して回転させている燃える火の塊〔星々〕をもっと注意深く観察し、そして聴くがよい、神々しきセイレーンたち〔星々〕が天使たちの歌声に合わせて作り出す音や、かれらの天上的な豎琴が奏でる音を。」続いてウゴーネは（地球を指さしながら）言った、「下の方に目をやつて、あの一番遠くに見える天体が抱えているものを見よ。十 あの星で武勇に対する誉れと諍いの原因となっているものは何とつまらないものなのか！君たちの栄華はどれほどの狭隘のうちに、また空しい孤独のうちに限られていることか！陸は海に囲まれて島のごとくであり、海は大洋とか広々とした広がりなどと呼ばれてはいるものの、それ自体はそうした呼称に値するほどのものではなく、浅い沼か小さい池でしかない。」十一 一人がこう言うと、もう一人は視線を下に向け、情けなさを覚えるかのように、笑みを見せた、と言うのもかれには地球上では多様な相貌を呈している海や陸や川などが、たった一つの点に見えたからであり、また愚かな人間が影や煙のようなものに執着して、己の価値を貶める権力やひと時の名声を追い求め、天が人間を招いて呼んでいるにも拘わらず、そちらに目を向けていないことを悟ったからである。十二 それでゴツフレードは答えた、「私が地上の牢獄〔肉体〕から解放されるのを神が望み給わないのなら、君に頼みがある、悪徳に満ちた世界にいる私が進むべき正しい道をいましてほしいのだ。」「それは」とウゴーネは答えた、「君がいま進んでいる道だよ。だから、この道から離れないようにしたまえ。僕が君に助言できるのは、遠くを放浪しているベルトルドの息子〔リナルド〕を呼び戻せ、ということだけさ。十三」と言うのも、もし神意によって君がこの軍勢の最高司令官に選ばれたのならば、君の計画の主たる遂行者もその時に決められているのであり、それは他ならぬリナルドなのだ。君には最高の役割が、リナルドにはそれに次ぐ役割が与えられている、君が軍の頭脳であるとする、リナルドは手というわけだ。誰もリナルドの代わりを務めることはできないし、君がそれをするのも許されていない。十四 魔法によって守られた森を伐採することができるのはリナルドだけなのだ、君の軍勢は——兵力の低下のために大いなる事業を中断しているように、撤退を迫られることになりそうだが——リナルドが戻ってくるならば士気を回復し、戦いを再開させるだろう、そして修復された城壁を破壊して、東方からやってくる〔エジプトの〕強力な軍勢も打ち負かすだろう。十五 ウゴーネは黙り、プリオーネが答えて言った、「ああ、かの騎士が戻ってくるなら、これほど私にとつて嬉しいことはない！君は人の隠された想いをすべて見ることができるようだから、かれに対する私の愛情や私の言葉の真偽も見抜いているだろう。だが、教えてくれないか、かれのもとに派遣される使者はどんな書簡を携えて、どの地域に向かつて行かなければならないか？私はいかに懇願するべきなのか、それとも命令するべきなのか？私のような行方は法と信義に反しないのか？」十六 するともう一人が言った、「君にたくさんの恩寵を垂れ給う世界の王〔神〕は、君にその統率を委ね給うた兵士たちから君がこれからも尊敬と信頼を受けることを望まれ給う。だから君は懇願してはならないのであり（懇願することはおそらく最高指揮官の沽券にかかわるだろう）、求められたものを授与するべきなのだ。誰かが赦しを求めたなら、すぐに赦しを与えるのだ。十七 ゲエルフォが君に願ひ出るだろう（神

がそのように計り給うがゆえに)、怒りによつて自ら道を踏み外したかの勇敢な少年に赦しが与えられるように、それによつてかれが戦場に戻り、榮譽を回復することができるように、と。若者(リナルド)はいま遠い地で閑暇と愛のうちに正気を失い妄想に耽つているが、数日のうちには必ず戻つてきて、重要な任務に備えるだろう。十八神は御自らの秘密を君たちの仲間のピエーロ(隠者ピエートロ)に明かし給い、それによつてピエーロはリナルドについての正確な情報が得られる場所へ使者を送ることができよう、そしてリナルドを解放し、君たちのもとへ導くための方法と方策についても使者たちはピエーロから教わるだろう。かくして天はついに外地を放浪する兵士たちをすべて君の聖なる旗のもとに帰還させ給うであろう。十九 さて僕は、君にとつて喜ばしいと思われることを短く最後に述べて、話を終えたい。君の血はリナルドの血といずれ結びつき、榮光に満ちた名高き一族がそこから生まれるだろう。「ウゴーネはこう言つて黙ると、風で散り散りになる煙のように、あるいは太陽の熱を受けて薄くなりゆく霧のように姿を消した。ゴッフレードは眠りから覚め、喜びと驚きが混ざつた感情を胸中に覚えた。二十 敬虔なるブリオーネはそれから目を開いて、すでに日が昇つたことを確認したので床から身を起し、強靱な身体に武具を付けた。暫くするとかれの天幕に武将たちが定例の会合のためにやつてきたが、武将たちはこの場に集まつて、他の場所における行動をいつも議論していた。二十一 神の啓示に導かれて新たな想いを得るに至つた善きゲエルフォは、会合において最初に発言し、ゴッフレードに向かつて言つた、「おお、慈悲深き王子よ、私は赦しを求めするために参りました、実は最近の咎めに対す

る赦しであるので(四)、ひよつとすると時機を早まつた性急な要望と思われるかもしれません。二十二 しかしそれが強きリナルドの救出のためであり、赦しを与えるのが敬虔なるゴッフレードであること、また赦しを求めているのが——卑しい身で仲裁者役を務めているわけでは全くない——私であることを考慮すれば、皆にとつて喜ばしい褒美となる赦しが必然的に与えられると私は信じます。さあ、リナルドが軍に復帰することを、過ちを償い、われわれ皆のために奮戦することをお認めください。二十三 魔の森を制圧するのは誰なのでしょう、かれでなければ、いかなる強者なのでしょうか?命を賭けて大胆不敵にも森と戦う者がいるでしょうか?かれが城壁を攻略し、城門を打ち砕き、他の兵士たちに先駆けて一人で町に攻め入るのを、あなたは見るようになるでしょう。さあ、かれを軍に戻すのです、神のために戻すのです、かれは軍にとつては大きな頼りであり、望みなのでから。二十四 連れ戻すのです、私にとつては従兄弟であり、あなたにとつては勇ましく、手際のよい部下である男を。かれが任務を怠り墮落するのを容認してはいけません、かつての榮譽を回復するように計らうのです。あなたの輝かしい戦旗のもとでかれが戦い、その武勇が語られますように、輝かしい実績が万人に知らされ、あなたが師匠として、また指揮官として称えられますように。」二十五 ゲエルフォがこのように懇願すると、他の武将たちはかれに賛同する言葉を口々につぶやいた。そのためゴッフレードは、あたかも前に考えていなかったことに考えを巡らすかのごとく、「どうして私にできようか」と言つた、「そなたら全員が求め、望んでいる赦しを与えないことなど?厳しい処罰は行われず、多数の意見が通り、規範となるべし。二十六

リナルドは戻るべし、これからは激情に駆られないようにすべし、自らに向けられた皆の高い期待と全軍の望みに応えるべく戦うべし。だが、おおグエルフォよ、かれを連れ戻すための段取りは君がしなければならぬ。君が手はずを整えれば、かれは直ちに戻ろうとするはずだ。使者となる者を選んで、若武者がいると思う場所に派遣するのだ。」

二十七 ゴッフレードが発言を終えると、デンマーク人の兵士（カルロ）が立ち上がって言った、「私が使者となつて行きたい、どんなに長く、危険な旅になつても構わない、かの価値ある剣（^五）を届けることができるのであれば。」この男は度胸があり、腕っ節も強かつたので、その申し出をグエルフォはとても喜び、かれを使者の一人とし、もう一人については、慎重で、洞察力に長け、抜け目のないウバルドとした。

二十八 ウバルドは若い頃に多くの国で見聞を広め、さまざまな風習に接した、かれが巡つた地域はわれわれの世界のもつとも寒い圏から灼熱のエチオピアにまで及び、徳と学を修めようとする人物だったので各地で言葉や習慣や宗教上の儀式を学んだ。円熟した年齢に達してグエルフォに迎えられるその部隊に加わり、たいへん大切にされた。

二十九 これらの使者に対して有能な英雄を呼び戻すという大事な任務が与えられた。グエルフォは二人をボエモンドが王国の首都とした町へ派遣しようとした、なぜならリナルドがそこにいると広く噂され、またそれを裏付ける情報もあつたからである。しかし善き世捨て人は誤つた地に使者が向かおうとしていることを悟り、使者とその周りにいる者たちの会話に割つて入り、三十 言う、「おお騎士士たちよ、世に流れている怪しげな噂を真に受けることは、そなた

らに無益な旅をさせ、道を誤らせる不実で、分別を欠いた指導者に従うことですぞ。そなたらがいま向かうべき地はアスカローナの町の近くにある海岸で、一筋の川が海に流れ込んでいます。そなたらはその場所で、われわれの友である人物と会うでしょう。この男の言うことを信じなさい、かれがそなたらに言うことは、私がそなたらに言うことなのです。三十一 この男は見ることに関しては超人的な能力をもっているのです。そなたらが重要な使命を帯びて旅をしなければならぬことも私から聞いて（ずっと前から）熟知していました。かれはそなたらに知恵を授けるとともに、そなたらを必ずや丁重に迎えるでしょう。」二人にそう言うと、カルロも一緒に行くもう一人の使者もピエトロに何も尋ねず——と言うのもピエトロには常に神の威光が射しているので——言われた言葉に従つた。三十二 二人はいとまごいをする、望みに駆られて、途中でどこかで休むこともなく、近くの海の波が海岸で砕けるアスカローナの町を目指して歩いた。そして海から発せられるざわめきや轟きが聞こえてくる前に、最近降つた雨によつて水嵩を増した川のところにやつてきたのだが、三十三 川の水は川床に収まる量を超え、矢よりも勢いよく早く流れていく。二人が嘩然していると、神々しい表情の老師（アスカローナの魔術師）がかれらの前に現れ、その出立はと言えば、頭に櫛の葉の冠を付け、白い麻で編んだ飾り気のない長襦袢を着ている。老人はしなやかな棒を振り、足を濡らさないうで水の上を歩き、流れに逆らつて川を渡る。三十四 極地近くでは河川が冬に凍結して、ライン川でも村の娘たちが氷上に線を描きつつスケートを楽しむことがあるが、老師は凍っているわ

けでも固まっているわけでもなく流れている水の面のの上を進んできて、自分をじっと見つめている二人の使者がいるところに瞬時に着くと、言った。三十五 「親しきご兩人よ、そなたらは困難で骨の折れる搜索をなさっている、誰かの助けを得るほうがよろしいでしょう、何しろお探しの兵士は、ここから遠く離れた未知の危険な地域にいるのですから。そなたらの仕事は何と多くの、嗚呼、まだ何と多くの時間を要することか！何と多くの海を越え、浜を超えて、進まないといけないことか！われわれが知る世界の外にまで、そなたらは搜索の範囲を広げないとなりません。三十六 だが、私の秘密の部屋がある地下洞に入ってみませんか、その中で私がそなたらにする話は役に立たない話ではなく、そなたらがよくわきまえておくべき話ですから。」こう言って、かれらのために空間を作るように水に命じたが、すると水は直ちに引き下がり、こちら側とあちら側で山のよな形の壁を作ったので、二人には水が双方に分かれたように感じられる。三十七 老師は二人の手を取って、川の下にある大地の深いところへかれらを連れる。そこには弱々しく薄い光しか射していないが、それは森に射し込むまだ満ちていない月の明かりにも似ている。しかし薄闇の中にあつてかれらが見たのは水をいっぱい湛えた巨大な洞窟であり、それはわれわれの世界におけるあらゆる水流の源であり、泉となって湧き出たり、川となって流れたり、池となって澱んだり、広範囲に流れ出て湖となったりしている。三十八 ポー河が生まれるのが、イダスペ河やガンジス河やユーフラテス河が発するの、ドン河が最初に流れ出るのが見える、そしてナイル河のその知られざる水源もここでは隠されない。かれらはさらに下方に

もう一つの小川を見いだすが、ここでは液状化した亜鉛と溶けた美しい銀が流れ出ている。これらの物質は次に太陽によって純化され、柔らかな液状部分が固まって銀塊や金塊となる。三十九 価値ある小川の四方八方が貴重な鉱物を嵌め込んだような岸辺を伴っているのをかれらを見る。その一帯は沢山の松明が点っているかのごとく輝き、闇の不気味さを減じている。ここでは鮮やかな青、サファイヤやヒヤシンスの空色が輝き、ルビーが燃えるように光り、堅いダイヤモンドが煌めき、美しいエメラルドが愛らしく微笑む。四十 兵士たちは驚愕しつつ進み、驚くべき事象で頭がまったく混乱してしまい、言葉を発することもできない。それでもウバルドは漸く声を上げて案内役に尋ねる、「何とぞ、父よ、私たちにおっしゃってください、どこにわれわれがいて、どこにわれわれを連れよう」とされているか、そしてあなたの正体を語ってください、私は自分が真実を見ているのか、あるいは夢、あるいは幻想を見ているのか分からないのです、それほど私の心は大きな驚きで一杯なのです。」四十一 老師は答える、「あなた方は大地の巨大な懐におられます、あらゆるものがその内部で作られます。あなた方は私の案内がなければその内部の奥深いところまで入っていくことができません。あなた方を私の館にお連れしましょう、それが見事な光りによって照らされるのをやがてご覧に入れましょう。私は異教徒として生まれましたが、後に神に愛でられて洗礼を受け、新たな人生を歩むこととなりました。四十二 私が摩訶不思議なことをやったからと言って、それがステュクスの天使たち〔悪魔たち〕の力を借りてやったとは思わないでください（神よ、私が呪文を唱えたり、煙を立てて儀式を行ったりしてコキトウスとフレジェ

トンテ〔地獄〕を従わせようとすることを禁じ給え)、私は草や泉が内部に秘めている力を探るために日頃から調査をしているのです、また自然界の知られざる他の神秘や星々のさまさまな運行を研究しているのです。四十三 ですから私はいつも天空から遠く離れた地下の住処にいるわけではなく、レバノンやカルメロ山にある見晴らしのいい館にすることも多々あるのです。そこでは金星や火星のさまさまな様相が何にも邪魔されないで観察でき、ゆつくりと、あるいは高速で回転し、善き光や悪しき光を放つ他の星々も見ることができるとです。四十四 私は足下で「大地の観察をすること」その時々雲の厚みが、虹からその時々雲の色が分かるのです。雨や露の生成過程や、風の流れ、雷電がいかにかに発火して、稲妻が如何なる道筋を通って走るかも観察します。彗星や他の発光物体についても間近で把握することができ、私はかつて自分自身に惚れ込んでいました。四十五 私は自惚れがあまりにも強かったので、創造主たる神が自然界に対して及ぼす力を完全かつ正確に計測していると思ひ込んでしまいました。しかしあなた方のピエーロが聖なる河〔ヨルダン河〕で私の頭に水をかけ、私の汚れた魂を清めてくださった時、私はより高い境地を視るようになされ、私の視野がそれ自体では誤りに満ちて不十分であることに気づかされたのです。四十六 その時に私は知りました、私たちの心が第一の真理の光と向き合うということとは夜行性の鳥が太陽に接するのと同じことだということ、そして私自身と、私をかくも驕慢にさせた愚説を一笑に付しました。しかしピエーロの求めに応じてそれまでの研究と活動は続けているのです。いま私はかつての私と幾分違う人間となり、神に仕

えるとともに、神に教えを請い、四十七 神のうちに安らぎを覚えます。神は命令を下され、教えを垂れ給う師匠であるとともに權威ある至高の主君でもあられますが、自ら行われ給うに相応しいことを〔魔術師である〕私に行わせ給うこともあるのです。さて、無敵の英雄が遠方の虜囚の地から軍に戻るようするのは、神が私に与えられた仕事でしょう。私はピエーロから知らせを受けて、あなた方をずいぶん前からお待ちしていました。四十八 このように兵士たちに語りつつ、老師は自らが暮らし、休む住居のあるところへやってくる。それは洞窟の形態をとった住居で、中には大きくて広い部屋や広間を備えている。内部の空間全体が大地の豊かな鉱脈の中で育まれた貴重な石の輝きに照らされている。そしてあらゆる装飾が人の手でなされたのではなく、自然に生み出されたように見える。四十九 そこには客を手際よく迎える召使いたちが大勢いて、銀の食器が並べられた豪華な食卓には水晶や金の大きな花瓶もあった。だが、客たちの食欲が満たされて、喉の渇きも癒やされると、「いよいよ時は来た」と魔術師は騎士たちに向かって言った、「そなたらが最も知りたいと願っておられることを明かす時が。」

五十 それから続けて言った、「策略と欺瞞は邪悪なアルミードの仕業なのです。かのじよが如何にしてキリスト教軍のところへ来て、如何なる方法で大勢の兵士たちを連れ出し、導いたか、こうしたことはそなたらの耳にも少し入っているでしょう。不誠実な女将がのちに兵士たちを鉄の鎖で縛り上げ、かれらをガザの町に大勢の護送兵とともに送ったことや、その移動の途中でかれらが解放されたことも、そな

たらは聞いておられるはずです。五十一 いま私がそなたらにお話しするのは、その後起こった事であり、そなたらがまだご存じではない事実なのです。悪しき女魔術師は多くの罫を仕掛けて捕えた獲物が奪われたことを知ると、悔しさのあまり両手を噛み、怒り狂って独白しました、《私の大勢の捕虜たちを解放したことをあの男には絶対に誇らせない。五十二 もし残りの捕虜たちをかれが逃がしたならば、かれを捕虜にしてやるわ、他の〔捕虜となった〕者たちに与えられた罰と長い苦しみを、かれに味わわせてやるわ。それだけで私は満足しない、キリスト教軍全体に広く苦しみが及ぶようにしてやるわ。》このように呟くと、これから語りますような邪な謀略を仕組もうとします。かのじよは自分の部下たちがリナルドに襲われ、そのうちの何人かが殺害された、その場所にやってきました。五十三 リナルドはこの時、自分の体から武器を外し、異教徒が付けていた武器を身につけました。おそらくより知られていない、目立たない鎧を着込むことで、正体が知られないようにしようとしたのでしょう。魔女は〔リナルドが脱ぎ捨てた〕鎧を手にとると、それを胴体だけになった死体に素早く付け、それが人目につくようにしました。川の岸辺にそれを置いたのですが、フランク人たちがそこにやってくることを、かのじよは予見していたのです。五十四 このことをかのじよが予想していたのは、多くの密偵を周辺にいつも派遣していたからで、かのじよはキリスト教軍に関する情報をつねに入手し、兵士たちの誰が軍から離れ、誰が軍に戻ったかも知っていました。悪しき魂たち〔悪魔たち〕とも頻繁に話し、長く歓談することもあります。そんなかのじよは不実な策略を巡らすために都合がいい場所に死体を置いたのです。

五十五 その近くにきわめて抜け目のない従者を配備し、牧人の服を着せ、偽りの言動をとるように命じ、それは実行されました。この従者はそなたらの軍の兵士たちと話し、かの疑いの種をかれらに植え付け、その種がのちに諍いや不和を生み、さらには軍内部の騒動を引き起こしたのです。五十六 そうなったのも、ゴッフレードがやったことのためにリナルドが殺されたと——かのじよの思惑どおりに——信じられたからです、その間違った説は真実が判明したときに消え去ったものではありませんが、それは後日談です。アルミーダの巧妙な策略は当初の段階ではこのような——つまり私が申しましたような——展開を見たのです。さて、かのじよがリナルドをその後どのように追いかけるか、その結果何が起こったか、さらにお話しすることにしましょう。

五十七 アルミーダは用心深い女狩人のように渡り場でリナルドを待ち伏せます。リナルドがやってきたのはオロンテ川〔トルコを流れる河〕の流域で、そこでは川の流れが二手に分かれ小さな島を作り、その先でまた一つに合わさっています。岸辺に東柱が立っていて、そこから少し離れたところに一艘の小舟があるのをかれば見ます。そして東柱に美しく施された白い大理石の装飾に目を引かれ、そこに金色で書かれている文章を読みます。五十八 《おお、意図してか偶然によってか、この岸辺に旅の途中で立ち寄ったあなたが誰であるにせよ、この小島には世の東西を探しても見つからないような驚異が隠されています。それを見たければ川を渡りなさい。》興味を抱いたかれは、警戒することなくすぐに川を渡ろうとします。小舟が小さかったので、

従者たちをその場に残して、自分一人だけが乗り込みます。五十九
小島に着いて、あたりを歩きながら興味津々たるかれは周囲を見渡し
ますが、洞穴や小川や花や草や木々など以外には何もありません。そ
のため騙されたのかもしれないと思いつつも、その場所があまりにも
心地よく、さまざまな面で魅力的だと思われたので、かれは歩みを止
めてそこに座り、兜を外して、優しく吹き寄せるさわやかな微風でほ
てつた額を冷やします。六十 その間耳に届いていた川の流れに奇妙
な音が混じっていたので、そちらに目を向けると、流れが逆になり
回っているところがあることに気づきます。そしてその渦のところか
ら金色の髪が出てきて、そして少女の顔が浮かび上がり、そして胸と
乳房、恥ずかしい部分までが〔…〕六十一 夜に行われる劇の舞台で
妖精や女神がゆつくりと現れるように、姿を現してきました。この少
女は本当のセイレーンなどではなく、魔術が作り出した幻想なのです
が、ティレニア海の海岸に近い海にかけて住んでいたセイレーンたち
の一人とまったく似通って見えます。美しい顔をしているだけではな
く、声が素晴らしく、空や風を魅惑するように歌います。六十二 《お
お、若者たちよ、あなた方が四月と五月の（青春の）緑の葉や花の衣
装で包まれている間、栄光や名誉が放つ偽りの光りがあるあなた方の柔ら
かな心を感わしませんように！心地よいものを追い求め、年齢が生み
出す果実を最良の時機に収穫する人だけが賢いのです。これは自然が
説いていることです。それなのにあなた方は頑なに自然の勧告を聞き
入れないのですか？六十三 愚かではないですか、あなた方の若い年
齢が与える——それは短い間しか与えられないのです——貴重な贈り
物を放棄することは？世の中が名誉とか価値とか呼んでいるものは名

前だけの、実体のない虚像です。名声はあなた方のように自惚れた人
間たちを甘い言葉で誘惑し、見かけは素晴らしいものですが、それは
餌であり夢であり、否、夢の幻であり、ちょっとした風で薄くなり、
消えてしまうのです。六十四 不安がらずに体を喜ばせ、静かな心で
喜ばしき自然に虚弱な感覚を委ねるのです。過去の苦悩は忘れ、諸悪
が迫り来るのを恐れるがあまり、惨めな状態を呼び込んではいけませ
ん。天が雷を落とし、矢を放つても気にとめてはいけません、天には
好きなように威嚇させ、矢を放たせるのです。これが英知であり、こ
れが辛い生き方なのです、そのように自然は教え、そのように勧め
ているのです。六十五 このように悪しき少女は歌って、甘い言葉
で巧みに若者を眠りへと誘います。眠気がゆつくりと忍びより、かれ
の感覚は眠りに操られ、隷属します。いまや雷鳴でさえ、いわんや他
の音も、死んでいるかのように静かに眠るかれを自覚めさせることは
できません。偽りの魔女はその時隠れていた場所から出てきて、復讐
を果たすためにかれの体の上に馬乗りになります。六十六 しかし視
線をかれに合わせ、安らかに息をするかれの表情と、閉じてはいるが
微笑むような美しい目を見たとき（もしかれが目を見開いたらどうす
るのでしょうか？）、かのじよは躊躇して動きをまず止め、それから
自分の体をかれに近づけますが、その姿を見ているとあらゆる怒りが
鎮まっていくように感じます。美しい顔にいまや見とれたかのじよは、
泉におけるナルキッソスのようです。六十七 顔から吹き出た汗の玉
を自らのベールでそっと拭い、優しく風を送って暑さが夏空のもとで
眠るかれの身に堪えないようにしました。こうして（誰がそれを信じ
ようか？）目から発せられる炎——それは目が閉じられていたので勢

いこそ弱くなっていました——がダイヤモンドよりも硬くなっていた心の氷を溶かし、かのじよは敵であることをやめて恋する女へと変貌したのです。六十八 かの心地よい草原に咲いていたイボタノキや百合や薔薇を不可思議な技を使って束ね、次にしなやかではあるがきわめて強い縄を編みます。それでかれの首や腕や足を縛り、こうしてかれを捕え、かれを虜にします。眠っているかれをその場所から己の馬車に運ばせると、空を猛スピードで駆けていきます。六十九 ダマスカスの国へ戻るのではなく、海の中にある自らの城に戻るのでもなく、かくも貴重な捕虜を失うことを恐れ、自らの恋心を恥じるかのじよは、広大な海の中に姿をくらませます。その場所はわれわれの岸辺から出港した船がまれにしか、あるいは全く向かわない、われわれの世界の外にある場所なのです。そこに浮かぶ或る小さな島がかのじよの隠れ家として選ばれます。七十 近くの島々とともに幸福の女神からその名をとった小島です。彼女は島に着くとひとけがなく、暗い木々が作る濃い影に包まれた山を頂上まで登り、山の肩と中腹に魔術の力で雪を降らせませんが、山頂付近は雪の全くない、緑で覆われた心地よい空間にし、湖の近くに館を建設します。七十一 常春の環境にあるその館の中で、かのじよの愛人「リナルド」は淫らな愛の暮らしを、かのじよと営んでいるのです。さて、あなた方はこのように遠方の地にあり、隠された監獄から若者を救い出し、疑いと嫉妬を抱く女「アルミード」に任せ、山と館を監視する輩を制圧しなければならぬのです。その島にあなた方を連れて行く者や、貴い使命を帯びたあなた方に武器を供給する者は必ずや現れるでしょう。

七十二 あなた方はこの川から離れるとすぐに、顔は若い、相当な年齢の女性「運命の婦人」と会うはずですが、長い髪を額のところで巻き、多色に染められた服を着ているので分かるでしょう。この女性があなた方を、鷹が羽を広げるより速く、稲妻が走るよりも速く、大海原へ連れ行くのです。かのじよは帰りも「往路と」同じように忠実にあなた方を導くでしょう。七十三 魔女の館がある山の麓であなた方は、シューシューと音をたてながら這いずる奇怪な大蛇や、背中の剛毛を逆立てる猪や、大きな口を開ける獅子や熊を見るでしょう。しかし私から受けた杖を振れば、杖が空気に触れて発する音に恐れをなして近寄ってこないでしょう。そして（もし私の目に狂いがなければ）もっと大きな危険が山の頂上で待ち受けているのです。七十四 山頂には澄んで清らかな水を湛えた泉「笑いの泉」があり、それを見る人は喉の渇きを覚えます。しかしその透明な冷水には秘密の悪しき効力をもった未知の毒液が混入されていて、そのきらきらと輝く水をほんの少しだけでも飲んだ人は興奮し、愉快になり、次に笑いだし、最後には笑いすぎて死んでしまうのです。七十五 邪悪な致死の水をそなたらは避けて、口を近づけて飲むとしてはいけません、岸辺の草の上に置かれた食べ物にも、魅惑的な顔をして微笑み、甘い声で誘惑してくる不実な娘たちにも惑わされてはいけません。そなたらは娘たちの欺瞞に満ちた視線や言葉に惑わされないようにして、大きな扉から「館が建つ敷地の中に」入ってください。七十六 敷地の中は抜け出すことのできない迷路になっていて、多くの入り組んだ環道が曲がりくねって走っていますが、私がそなたらに渡す紙には地図が付いているので、そなたらが中で迷うことはないでしょう。迷路の中心には園

があり、あらゆる木の枝から愛の吐息が発せられているように感じられます。園の中の緑の若草の上に騎士とその相手の女性が横たわっているでしょう。七十七 だが、女性が愛する男を残して他の場所に向かったら、そなたらは直ちに男の前に姿を現して、私から受け取ったダイヤモンドの盾を男の顔に向けて掲げてほしいのです、そして男が自分を鏡に映して、自分の顔や自分が着ている女々しい衣装を見るようにしてほしいのです、そうすれば恥辱と憤怒が男の胸からあるまじき恋を追放するでしょうから。七十八 いまやそなたらに与えるべき忠告は他にないのですが、ひとつだけ言っておきたいのは、そなたらが困難に遭遇することなく旅をし、魔法にかけられた空間の奥にある秘められた場所にまで到達できるだろうということです。なぜなら、魔術がそなたらの歩みを遅らせることも、旅を中断させることもないと思われるからです。そなたらを導く案内役の計らいにより、アルミーダもそなたらがやってくることを予知できないでしょう。七十九 その後のかのじよの館から脱出し、帰ってくる際にも、そなたらの安全はやはり守られているでしょう。でも、もう床につく時間です、明日、そなたらは日が昇るとともに起きなければなりません。」老師はこうかれらに言うと、夜を過ごすべき部屋へとかれらを導いた。感謝しつつも「旅に」不安を感じているかれらをそこに残し、善き老人は自らも休むために引き下がった。

第十五歌

一 生まれつつある美しい陽光が地上に暮らすあらゆる生き物をすでに労苦へと誘っていたとき、賢者（「アスカローナの魔術師」）は例の紙

と盾と黄金の杖を持って二人の兵士たちのところへやってきた。「長い旅の準備をしてください」と言った、「顔を出した太陽が高く昇る前に。約束のものを全て渡しましょう、魔女の妖術に打ち勝つために必要なものです。」二 兵士たちはすでに起床し、屈強な体に武具をすでに付けていたので、陽が射さない「地下の」道を歩き出した老師の後をすぐに追う、来たときに自分たちが足跡を刻んだ地面を、その同じ道に戻るいま、再び踏みつける。川辺に着いたとき老師は言う、「友よ、そなたらに別れを告げましょう。どうかご無事で。」三 川が「地下道から出てきた」兵士たちを川底で迎えると、流れが上方へと優しく持ち上げて岸へと運び、その様は川底へ何らかの力を受けて沈んだ軽い葉が水面に押し上げられ、岸辺の柔らかな土の上へ運ばれるのに似ている。土手に上がったかれらは約束されたかの案内の女の姿を認め、小さな舟があるのを見るが、小舟の艫かぶにいるのはかれらを導く運命の婦人である。四 婦人の額には巻き髪が垂れ、その視線は優しく、慈愛にあふれ、静かで、表情は天使のそれにも似て、燃え盛るような光で照らされているようである。かのじよが着ているガウンは或る時は青く、或る時は赤くといった具合に、さまざまな色に変化するの、繰り返し見ると、いつも前とは異なつたふうに見える。五 上品で愛らしい鳩の首の周りの羽毛は二回として同じように見えることがなく、太陽の光を受けて多彩な色に染まる。そのように「婦人のガウンは」、ときに燃えるように赤いルビーの首飾りのようであり、ときに緑のエメラルドの輝きを放つかのようであり、ときに両方の色を帯びるかのようであったりして、美しく姿を変え、百種類の方法で見る者を魅了する。六 「お乗りください」と婦人は言う、「おお、幸いな

る方々よ、海を安全に渡るこの私の舟に。この舟が進むところではない
つも順風が吹き、全ての時化が収まり、あらゆる重荷が軽くなります。
私の主は慈悲を惜しみなく垂れ給い、従者として、そして案内者として、
この私をあなた方のもとに今しがた遣わされました。」婦人はこ
のように述べると、次に湾曲した松の木〔舟〕を川岸により近づけた。

註

(一)

原作のトルクワート・タツソ著『解放されたエルサレム』は一五八一年初刊。今回は昨年度の紀要四十九号の続きとなる第十三歌二十四節から第十五歌冒頭までを訳出する。訳文中の「」は筆者による補足説明、「()」は原文に付いているもの。

(二)

第二十歌でエジプト軍は到着するが、リナルドとその仲間により打破される。ここはこの叙事詩(全二十歌)の物語が大きく展開する場面である。著者のタツソ自身は次のように述べている。「物語の本当の中心は第十三歌です。そこまでの情勢はキリスト教軍にとって悪くなる一方でした、イスラム軍に攻め込まれ、司令官が負傷し、それから壁破車が焼かれ、森が魔法にかけられ、…猛暑や水不足に悩まされ、あらゆる活動が妨害される。しかし第十三歌の半ばから形勢が逆転し始め、ゴッフレードの祈りで神は雨を降らし、徐々にあらゆることキリスト教軍にとって都合がよいように進みます。」(P.VI 2-4)

(三)

「すでに地上の生を終え、肉体より解放されて今はあそこに見える場所に住む人たちの、つどい集まっている天空の、辿りゆく道であるぞ」父が示した所は、燃え立つ星々に囲まれ、眩しい限りの白熱の光りを放っている…(キケロ『スキピオの夢』八、「世界の名著」十三所収) 銀河のことを述べているが、ウゴーネの語りには他にも九節の天体の音楽に関する話しや宇宙から見た地球に関する話などキケロのこの著作から想を得ているものがある。

(四)

第五歌二十六節以下参照。

(五)

第八歌三十六節参照。

(六)

第十歌七十二節参照。

(七)

第八歌五十二節参照。

(八)

第八歌五十七節以下を参照。